



会が得られました。

喘息の日常診療、加えて、喘息は吸入療法が重要な疾患であることから、最も効率のよい吸入を指導するためのハンズオンセミナーを学会として初開催し、全国から指導者と七十名以上の受講者に参加していただきました。特に受講者は若手医師のみならず研修医、薬剤師、看護師、医学生、薬学部生と多種多職種が加しました。

このように基礎医学的にも臨床医学的にも非常に有意義な学会を開催することができました。これもひとえに肥後医育振興会を介して多くの皆様から多大なご寄附をいただき学会の運営に貢献していただいたためと、心より感謝申し上げます。

す。  
（写真は、学会ポスターならびに吸入指導ハンズオンセミナー）

### 第二十八回日本消化器癌発生学会総会・第九回国際消化器癌発生会議

熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学分野 教授  
会長 馬場 秀夫

二〇一七年十一月十七日（金）、十八日（土）の二日間、ホテルメルパルク熊本にて、第二十八回日本消化器癌発生学会、第九回国際消化器癌発生会議を開催いたしました。日本全国から四五五名にのぼる多数の方にご参加頂き、大変盛会のうちに終了いたしました。

日本消化器癌発生学会は、「消化器癌の発生と進展の解明」を目的として、一九八九年に日本消化器癌発生研究会として発足し、一九九七年に現在の日本消化器癌発生学会となった歴史と伝統ある学会です。その起源と特徴は、細分化され過ぎた消化器癌を同一次元で論じ、かつその類似点、相違点を比較検討することによって、その発生・進展を知り、ひいては治療に結びつけること、すなわちより大きな見地から消化器の癌として総括し一本の太い幹に戻ることであり、またその研究の実現のため、外科、内科、病理、基礎の各分野にわたる幅広い横断的な研究者が集い活動を行うことにあり

ます。熊本では一九九九年に、小川道雄教授（熊本大学第二外科）が第十回の本学会を開催されており、十八年ぶりの開催となりました。

今回の学会テーマは、これまでの研究を通じて見えてきた課題を捉え、消化器癌研究の「未来に繋がる実り多い学会」になることを期待して、『Look into the Future in Cancer Research』といたしました。

今回は国際消化器癌発生会議と同時開催であり、Joan M. C. Bull 先生 (The University of Texas Medical School at Houston)、Heinz-Josef Lenz 先生 (The USC Norris Comprehensive Cancer Center)、Jimmy So 先生 (National University Cancer Institute, Singapore)、Ajay Goel 先生 (Baylor University Medical Center) という高名な研究者を海外から講師として招聘し、これまでの研究成果についてご講演頂きました。

シンポジウムのテーマとしては、①癌代謝を考えるー臨床応用への展開を目指してー、②腫瘍微小環境の浸潤、転移、薬剤耐性への影響、③癌ゲノム解析に基づいた個別化医療、④消化器癌における腫瘍免疫と治療への応用、を取り上げました。シンポジウムにはたくさんの演題を応募いただき、一般演題（口演、ポスター）を含めると一五五題という多くの演題をいただきました。いずれのシンポジウムにおいても最先端の研究結果が報告され、活発な質疑応答が行われました。

末尾となりましたが、本学会の開催にあたり、多大なるご支援を賜りました公益財団法人肥後医育振興会の皆様には心より厚く御礼申し上げます。

### 第三十三回熊本医学・生物科学国際シンポジウム報告

熊本大学大学院生命科学研究部 消化器外科学分野 教授  
馬場 秀夫

平成二十九年十一月十七日、十八日に第三十三回熊本医学・生物科学国際シンポジウムをメルパルク熊本で開催致しました。消化器外科分野が担当させていただきました本シンポジウムでは「Look into the future in cancer research」のテーマのもと外科、内科、病理、基礎という幅広い領域の研究者が一堂に会し、最先端の研究成果について活発な議論を行いました。

十一月十七日の「シンポジウム1 癌代謝を考える」では、東北大学加齢医学研究所 遺伝子発現制御分野の本橋ほづみ教授から、がんの悪性化をもたらすKEAP1-NRF2による酸化ストレス応答と代謝制御に関する最新の研究成果をご紹介いただきました。

「特別講演1」では慶應義塾大学医学部先端医科学研究所 遺伝子制御研究部門の佐谷秀行教授より、胃がんマウスモデルを用いたがん幹細胞の成立とがん進展の関係、治療戦略についてのご講演を賜りました。